

Title	Marcel Cohen, Instructions d'enquete linguistique, Institute d'ethnologie, 1928, Questionnaire linguistique 2 tomes, Institute d'ethnologie, 191, Rul Saint-Jacques, Paris, Ve.
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.4 (1928. 12) ,p.170(636)- 171(637)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19281200-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

頭であるに反し、この頭骨は短頭であり、ネグリトの頭蓋骨と最も類似することである。ネグリトは今日フロリッピン、アンダマン、マレー半島の山地に僅かに餘命を保つ人種であつて、かつては廣大な地域を占領してゐた形跡がある。印度支那の上古にネグリトに類似の人種の住みしことはネグリトの歴史を知る上にまた東方アジアの原始文明を論ずる上に極めて重要な事實である。エテヒアン・パット氏はネグリト族の分布と有柄石斧の分布に相互關係のあることを認めむとしてゐるが之はまだ甚だ解決困難な問題である。なぜならばフォーピンジャからも有柄石斧が見られ、しかも長頭の頭骨が共に出土してゐるからである。パット氏の筆法をもつてすれば、長頭の人種が有柄石斧を分布させたのではないかと云はれ得る。新石器時代の印度支那には長頭と短頭二種の人種が住み、兩者とも有柄石斧を使用してゐたのではなからうか。吾人は印度支那及び周圍の石器時代の遺蹟がますます今後精密に調査され有史前の人種移動を明かにせんことを切に望むものである。(松本信廣)

Marcel Cohen, Instructions d'enquête
linguistique, (Institute d'ethnologie,
1928)

Questionnaire linguistique, 2 tomes, (Institute d'ethnologie, 191, Rue Saint-Jacques, Paris, Ve.)

パリ大学内の Institute d'ethnologie (人種學研究所) には創

立以來マーセル・コーエン氏に託して未開民族の言語を調査する方法を研究員に講じて貰つてゐたが、今回氏はその講義案をまとめ、上記の如き小冊子を發行した。氏はアフリカに於て多年言語採集に従事し、此種の著作に適任此上なく、百廿五頁の小面積内によく言語採集者の心得べきことを網羅してゐる。この「指針」にはそれと同形の言語採集手帳二冊が添へられてゐる。第一冊には比較的採集し易い身體に關する語、動詞、人倫、自然動植物に關する語、代名詞、數詞、形容詞、感嘆詞等二百十九の單語例、廿三の短句例を挙げ、第二冊にはそれより稍こみいつた語、聞きにくい語百八十三、並びに動詞の變化、稍長い話例等を採集する仕組になつてゐる。各冊四聯づゝよりなり、一部落で第一聯を書き滿し終へるとついで第二の部落で次のセリを滿たすといふ風に、かつ各紙正副二枚づゝよりなり、カーボン紙、鉛筆を附し、一聯書き終ると副を皆切取線から破つて後についてゐる封筒紙に包み、パリーの人種學研究所に送付し、萬一の事故に備へ、また同時にその採集した結果がなるべく中心地に集つて、組織的に利用されんことを期してゐる。人種學研究所は此言語採集指針及び採集手帳を廣く殖民地の宣教師、官吏、探險者の心ある者に配布し、もつてフランス殖民地土人の言語を蒐集しその湮滅を防がむと企圖してゐる。吾人は、この方法によつて比較的なほ調査ゆきとどかぬフランス領の印度支那山地の諸部落の言語が急速に採集されんことを切望してやまぬ。それと同時に日本學界が之に習ひ、その領土、ミクロネシア、臺灣等の言語調査を同じ様な方法によつて試みんことを切に期待するものである。もとより此方法も完

壁ではなく、吾人は今一層精密な方法で言語調査をなす必要を認めるものであるが、今日の如く中央學府に於て言語研究が等閑視されてゐる場合には、殖民地の官吏、布教師その他の共力によりまがりなりともその言語資料を一日も早く蒐集保存する手段をとりたいたものである。(松本信廣)

Early History of Assyria, by Sidney Smith.

Royal Eyo. xviii + 4 18pp. London, 1925.

故L・Wキンガ教授の計畫せる『バビロニアとアッシリヤの歴史』は、一九一〇年に、その第一卷 A History of Sumer and Akkad を、一九一五年にはその第二卷たる A History of Babylon を出だし頗る學界の好評を博したのであつたが、次いで出づべき第三卷のアッシリヤ史は、一九一九年同教授の逝去せるため、一時中絶の姿となり、我等の遺憾とする所であつた。しかるに斯界の權威ホル氏の慫慂により大英博物館エチプト・アッシリヤ考古部のシドニー・スミス氏がキンガ教授の遺業を紹介いて、爰に原計畫の最後に宛てられたアッシリヤ史を新に二卷に分ち、その前半の出版を見るに至つたのは、大にスミス氏の努力に對して謝する所がなくてはならぬ。

アッシリヤの古代史に關しての一等史料は最近八年間に多大の増加を來たし、發掘その他の結果は續々刊行せられつゝある。隨つてキンガ教授の著述出版後、同書に對しても幾多補充すべき事

項を生じたので、前者を時代に副はしむべく、成るべく重複を避けつゝ、本書は書かれたのである。その記述に於て新史料、新學説は寧ろよく取入れられた方である。従つてアッシリヤとシリヤ及びタウルス山外の小アッシヤ地方との最古の關係等については、著者自身も未定稿 (are but half-formed) なることを(序文八頁)明かに斷つてゐるのである。

しかし著者は近くまで解讀不能の文字とせられてゐたケタ文字については、プラハ大學の Hrozy 教授の研究の結果をドイツの少數學者と共に承認し、懷疑論者に對して反對を表明しつゝ、なほ本書の記述に當つては相當慎重の態度をとり、キンガ教授の前二著に於て詳細に論ぜられたる紀年の問題については更に考究を重ね、主として E F ヲイドネル氏に従ひ、特に紀年論なる一章を本書の附録に加へ、アッシリヤの言語學研究に關してはなほ多くの異論と確實を期し得ざるの點をも認め考古學的事項に關しても論じ特にアッシリヤの起源に關して近年八釜しいかつた問題が考慮せられ、アシニール市が最後にアッシリヤ國に發展するに至つた政治的發展の經路竝に通商關係によつてアッシリヤに及ぼした影響が特記せられぬ。斯くして本書はスメリヤ・アッシリヤの初期に於ける文化問題を知るのに格好の良著であるが、本書の範圍は西曆紀元前一〇〇〇年迄に限られたるが故に、アッシリヤ史の本體を爲すその後の部分を含む後篇の出版の一日も早からんことを祈るのである。

しかし『アッシリヤの歴史』は古代世界の近代的研究に於てまことに奇異なる地位を占めてゐる。西方アッシヤに於ける重要な考